東海道五十三次　―知られざる穴場―　その⑨

（歌川広重　白須賀宿）

白須賀宿（32 番目）は JR 東海道や国道１号から遠く、ひっそりとしたたたずまいを今に残している。湖西市に入って間もなく火鎮神社の前に「夢舞台東海道」の道標があり、そこに白須賀宿の図版。これは最初に宿場が置かれた場所を示したもので、宝永４年(1707)の地震と津波で壊滅的被害を蒙った後、現在は潮見坂の台地に移転。その先に元町一里塚と高札場跡の説明板と小さな標柱が並んでいる。ここが坂の上の台地に移転する前の中心地。さらに進むと、また夢舞台の道標。その右側に小さな石柱があり、「右旧道」とあった。うっかり見落として直進してしまうと、潮見坂越えの現白須賀宿に辿り着けなかったかも。

右折後すぐ急坂に差しかかる。潮見坂である。頂上一帯は潮見坂公園になっていて、白須賀宿無料展示館「おんやど白須賀」が。明応８年（1499）の、浜名湖が海と繋がった大地震と津波、宝永４年（1707）の白須賀宿を壊滅状態に追い込んだ地震と津波のことなどを詳しく知ることが出来た。頂上を過ぎると緩やかな下りになって現白須賀宿に差しかかる。宿の入口に曲尺手（かねんて）の説明板があるが、要は桝形の別名。その先に大村庄左衛門本陣跡、その隣りが脇本陣跡、さらに問屋場跡と続く。少し行くと湖西市指定文化財「「白須賀の火防」の説明板。宿場が台地に移って津波の心配はなくなったが、強い西風の吹く冬場に火が出ると、当時は藁葺き家屋のこととてまたたく間に類焼した。それを防ぐため宿内に３地点・６場所に間口２間、奥行４間半の火防地を設け、火に強い槙を 10 数本植えたのである。現在、宿内には近江屋と書かれた家の横と向かい側に数本ずつ残っていて、静岡県内に現存するのは

ここだけとのこと。この先に最後の夢舞台東海道の道標があって、この道標に随分お世話になった静岡県ともいよいよお別れとなる。気になるのはこの道標に「境宿」という宿名が入っていたこと。答えの手がかりは広重の図。実は広重は次の尾州二川宿の図に「二川　猿ケ馬場」として柏餅を売る茶店を描いている。ここの餅は東海道の名物だったが、この茶店のある所は実は白須賀の「加宿」だった境の立場。「加宿」とは、江戸時代、人家少なく人馬を出しにくい宿駅に地続きの隣村をこれに加えて宿駅の用を弁じさせた所で、尾州二川宿の図に、遠州白須賀の加宿を描いたのは明らかに広重のおチョンボ。

「境宿」を過ぎると間もなく国道１号と合流し、延々４キロ以上の辛い側道歩き。途中、川とはお世辞にも呼べない細い溝があって、それが遠江と三河の２つの国を、もっと言えば静岡県と愛知県を分ける溝だった。歩いていてこそ発見できる穴場。愛知県に入ってからも我慢強くひたすら歩いて行くとようやく「二川ガード南」の信号で１号線と分かれて右折。新幹線の高架を潜り、東海道線の踏み切りを渡って左折すると二川宿（33 番目）の入口。宿内に残る遺跡としては二川宿一里塚跡、二川宿東問屋場跡、東駒屋、二川宿脇本陣跡、「史跡二川宿本陣遺構」、西駒屋、高札場跡と続く。その内東西の駒屋は、二川宿を代表する古い建物の、見事な格子戸を有する商家で、東の方は今でも現役のお味噌屋さん。

そんな二川宿にあっての圧巻は、「史跡二川宿本陣遺構」と併設の二川宿本陣資料館であろう。東海道ではここと草津本陣田中屋の二つしか残っていない。私が筆舌を尽くすよりも、興味のある向きはまず行ってみて、じかにその見事さに触れてほしい。

宿場を出て西に進むと道幅が急に広くなり、やがてＪＲ二川駅の前に出る。さらに西に進むと火打坂。坂の途中で左折するのが東海道だが何処で曲がっていいか分からず、人通りもなく立ち往生。結果的には左前方に松の木が１本、仄見えているのが正解の道だった。その道を辿り１号線と合流する地点に飯村一里塚の碑が建っていた。そのまま１号線の歩道を歩き続けると、５差路の交差点に行き着いた。そこに路面電車の「東八町」という名の停留所があった。東海道の宿駅で路面電車の残っているのは、吉田宿（34 番目）のあるここ豊橋市だけ。鵜飼を売り物の岐阜市が早々に廃止した愚を思えば、天晴れな快挙。

（歌川広重　吉田宿）

五差路の上の歩道橋を行き来して常夜灯とその説明板、吉田宿東総門跡とその復元模型を発見。この辺が吉田宿の東の入口。しかし復元模型の建っている前の道が東海道ではなく、１本奥の細い道であった。都会は路や道が多くて大変。その後も左折右折を繰り返しながら自力で、「曲尺手」と

いう名のバス停を見つけて、ヤレヤレ。その後は一気に高札場跡、問屋場跡、清須屋与右衛門本陣跡、江戸屋新右衛門本陣跡、脇本陣跡、吉田城曲尺手門碑、吉田城大手門碑等の遺跡が建ち並んでいて、やがて 23 号線との交差点付近で西総門跡と復元模型を見つけて吉田宿とお別れ。その後豊川に架かる橋に差しかかる。当時は吉田大橋と呼ばれ、岡崎の矢作橋、瀬田の唐橋と並んで三大橋と呼ばれていた。豊川に架かる橋にちなんで吉田宿が豊橋市と改名されたのは維新後の明治２年以降とのこと。

この橋を渡ってすぐ左折。堤防下の道が東海道。次の宿までの道は長い。道筋の聖眼寺に芭蕉句碑、下地交差点手前に下地一里塚跡碑があり、道なりに右に曲がれば左手に豊橋魚市場。その辺りから道が急に狭くなり、豊川の支流の放水路に架かる橋は、歩道はおろか車も容易にすれ違えないほどの狭さ。車の行き来があるたび、欄干にへばりついて難を逃れた。これが旧東海道だという確信を持てぬまま、長い道のりを進む。「伊奈一里塚跡」の碑を太鼓屋の前で見つけてヤレヤレ。その後１号線に合流するも、下から上の１号線への上り口が容易に分からなかった。ここまでは遺跡もなく、不毛の東海道であった。

次の御油宿（35 番目）に入る手前に大きな石灯篭があり、その下に「これより姫街道　遠州見附宿まで」と書かれた木の標識。見付宿で見たのよりお粗末。音羽川の御油橋を渡って宿内に入ると、「ベルツ花夫人ゆかりの地」の案内板。明治政府が招いた我が国近代医学の祖ベルツに、伊藤博文の養女になって嫁いだ花夫人の生家は御油の旅籠屋。その斜向かいに「御油宿高札場跡」の案内板。本物は「御油松並木資料館」に保存。

（歌川広重　御油宿）

ついでながらこの資料館には実物の三下り半（離縁状）も。この道の先の桝形を右折しすぐ左折した所に本陣跡の碑があり、右側に「イチビキ味噌」本店と旧大津屋（大旅籠）の建物。昼間の畑仕事と夜の売春に耐えかね集団入水自殺した、旅籠お抱えの飯盛女（幕府黙認の売春婦）を大津屋弥助が一人ずつ墓を建てて、「傾岳壬城信女」というように「傾と城」を戒名の中に分かち入れ、懇ろに葬った。その大津屋の子孫が中村姓で「イチビキ味噌」を興し、いまだに「特別大施餓鬼盆供水向塔　中村何某」として施餓鬼会に供養している。この道筋の少し先の東林寺の墓地の中の飯盛女たちの墓に塔婆は置かれていて、貴重な発見だった。